

近畿学校保健学会通信

No.106

平成15年8月31日発行
近畿学校保健学会事務局
〒657-5801 神戸市灘区鶴甲3-11
神戸大学発達科学部石川研究室内
TEL&FAX 078-803-7737
kinkigakkohokengakkai@yahoo.co.jp
振替口座 00940-5-181826

目次

第50回近畿学校保健学会（平成15年度年次学会）報告	・・・2
（1） 第50回近畿学校保健学会を終えて（お礼）	・・・2
（2） 座長報告	・・・3
（3） 学会印象記	・・・12
総会報告	・・・16
追悼文 「近畿学校保健学会名誉会員」小澤忠治先生を偲んで	・・・19
第50回日本学校保健学会開催のご案内	・・・20

平成16年度近畿学校保健学会のお知らせ

開催日時 平成16年6月5日（土曜日）

年次学会長 大矢紀昭（滋賀医科大学）

場所 ピアザ淡海（おうみ）（滋賀県立県民交流センター） 滋賀県大津市におの浜

第 50 回近畿学校保健学会年会報告（奈良教育大学）

第 50 回近畿学校保健学会を終えて（お礼）

第 50 回近畿学校保健学会長
奈良教育大学教授 北村陽英

第 50 回近畿学校保健学会は、平成 15 年 6 月 28 日朝から夕方にかけて、奈良教育大学で開催されました。学会長として、関係諸氏の皆様の御協力のおかげで無事に終えることができ、厚く御礼申し上げます。

学会当日は、2 つのシンポジウムと一般演題発表が 4 会場で行われ、一般演題では、37 題の発表があり、熱心な意見交換が行われました。

参加者数は、会員 140 名、当日会員 33 名、学生 26 名、合計 199 名で、近畿各府県だけでなく、遠く福岡県や愛知県からの御参加者もおられました。

50 周年を記念して行われた午前中のシンポジウムでは、近畿の学校保健の過去 50 年を振り返り、学会発足当時の学校保健の現状と現代の課題を語り、養護教諭養成の制度と歴史が少し触れられ、将来に向けて養護教諭は学校保健活動をどのようにしていくべきかがフロアーの方々と語り合われました。

午後のシンポジウムでは、山積みしている児童生徒の心身の健康問題について学校保健活動をどのようにしていけば良いかを考えるために、現代の児童生徒の心の健康について日頃の精神科診療経験と教育委員会による調査結果に基づいた意見、また、学校歯科医師や学校薬剤師の立場からの意見、そして養護教諭の日常の業務経験から、小学校保健室での多くの児童の心配な点と保健室運営の仕方次第で児童に笑顔が増えるようにすることができること等、それぞれの立場から具体的な貴重な話題が提供されました。司会者が心からの思いとして話された、わが国の子どもの現代と将来についての心配、それを救うために社会全体で考えねばならないという御提案は、最前線にいる教育者と教育関係者に真摯な取り組みをすぐに開始する実践力が要請されている、といったシンポジウムそのものの主旨であったと思われます。

学会長講演では、過去の学校精神保健活動の経験から、学校教育の最低限の目的、すなわち社会性の発達を強調しました。

本年度の近畿学校保健学会は、昔を振り返り、ひいては今日に目を向け、今日的な保健上の問題にどう対処すべきか、学校の保健室機能をこれまで以上に活性化させること、地域との関連機関と連携をはかることで直面する問題を具体的に解決する方法を考える、学校保健本来の使命に回帰する記念すべき 50 回大会であったと思っております。

参加いただいた皆様方、開催に向けて御協力いただいた諸機関の皆様方、ならびに大会運営に働いていただいた学生、院生のみなさんに改めてお礼を申し上げます。

2003 年 7 月 24 日

A会場

近畿学校保健学会50周年記念シンポジウム

近畿学校保健学会50周年記念事業企画委員長 勝野眞吾（兵庫教育大学）

本企画は近畿学校保健学会50周年記念事業のひとつとして第50回近畿学校保健学会（奈良）における近畿学校保健学会50周年記念シンポジウムとして設定されたものである。

記念シンポジウムを開催するにあたって企画委員会において数度の会議が持たれ、テーマを「近畿学校保健学会の過去・現在・未来を語る」とすること、シンポジストとして歴代幹事長をお務めになった上林久雄、武田真太郎及び林正の3先生、第50回年次学会長北村陽英先生、年次学会開催地奈良の養護教諭代表高田恵美子先生の5名、シンポジウムの司会進行を企画委員長の私が務めることとする骨子が決められた。

この記念シンポジウムでは、5名のシンポジストにそれぞれ異なった角度から自由に近畿学校保健学会の過去・現在それから未来を語っていただくことによって、本学会の50年の歩みが生き生きと、また立体的に浮かび上がると考え、堅苦しい報告形式をとらずむしろ座談に近いかたちで進行することとした。また、特にシンポジウムのためにレジュメは用意せず、50周年記念誌の冒頭に置かれる予定の「近畿学校保健学会50年の歩み」

上林久雄先生には、近畿学校保健学会設立前夜から学会創設、そして学会初期のあゆみについてお話をお願いした。上林先生は、戦後のわが国の子どもの健康問題、すなわち寄生虫感染、結核予防、姿勢の問題などを紹介され、このような健康課題解決を目指して近畿学校保健学会が創立された経緯を語られた。上林先生は、本学会設立の中心となった先達の先生方の視野にはWHO憲章や英国の包括的な健康理念 Comprehensive Health があり、高い志のもとにこの学会が全国に先駆けて発足したことを紹介されるとともに、学会初期には、それぞれ一家言を持たれる先生方の群雄割拠の状態があり、本学会が人間くさい緊張感のなかで回を重ねた様子を間近におられた証言者として語られた。

武田真太郎先生には医学、特に衛生学・公衆衛生学と学校保健の関わり、学校保健を支えてきたもうひとつの大きな柱である学校医、学校歯科医、学校薬剤師の本学会との関わりについてお話いただいた。武田先生はまず、医学部から教育学部に移られた個人史に沿ってお話を始められ、近畿では早い時期から「教育としての学校衛生（学校保健）」の視点があったこと、また近畿学校保健学会のメンバーが文部省等に対する「学校保健教育強化に関する建議」の中心的役割を果たしたことなどを紹介された。武田先生は、このように近畿から学校保健についての活発な発信が行われた当時、学校医、学校歯科医、学校薬剤師の三師もそれぞれの専門的な立場から学校保健に積極的に関与し、活気あふれる状況があったと話された。しかし、その後そのダイナミックな状況はむしろ衰退傾向にあることを指摘され、今改めて原点に立ち返り学校現場の抱える健康問題に対して対等で真剣な取り組みを行うことの重要性を説かれた。

第3代の本学会幹事長であり、また選挙によって選出された最初の幹事長でもある林正先生には近畿学校保健学会の学会としてのあゆみ、学会における研究の動向についてお話いただいた。近畿学校保健学会は発足20数年を経て、学会組織・運営を強化する機運が高まり、学会組織運営検討委員会が設立された。林先生は、この検討委員会を中心とする議論の積み重ねにより新し

い学会会則が制定され、学会事務所の常設と恒久的な会員制度の導入など、本学会が学会としての体裁を整えてきた経緯について順を追ってお話された。林先生は、また学会初代幹事長を務められた上林先生が就任にあたって「片すみの日陰にある学校保健を日の当たる場所へ。本学会の使命は会員のための研究ではなく、真に子ども達の健康のための研究である。そのために大学、教育現場、地域いずれにおいても密接な連携を保ちながら真剣な取り組みを行う必要がある。」と挨拶されたことを紹介され、本学会が一貫して学校現場における子ども達の健康問題をテーマとし、「与えられた学会ではなく創る学会」を志向して討議を重ねてきたと話された。そして、このようなあり方こそ本学会の特徴であり、今後も受け継いで行くべきであると説かれた。

第50回年次学会長の北村陽英先生には、長年たずさわってこられた教護教諭の養成および卒後研修の視点から近畿学校保健学会について語っていただいた。北村先生は本学会が近畿地区の養護教諭の先生方の研究発表、研鑽の場としての役割を果たしてきた一方、この50年の学会の歴史のなかでまだ養護教諭が学会長を務めた例がないという事実を指摘された。次いで、わが国の養護教諭養成が多様で複雑な形で行われてきたことについて触れられ、わが国の教育行政の制度的な不備のなかで養護教諭が医学と教育の狭間で悩みながら、しかし、学校現場で最前線に立って子どもの健康問題に取り組んできた実態を話された。また、現職教員に道を開いた新しい大学院制度が養護教諭の卒後研修の観点からも意義があると話された。

最後に高田恵美子先生に、第50回年次学会の開催地奈良の地元の養護教諭としての立場から地域、特に奈良県における養護教諭と学校保健（健康管理・健康教育）、実践の視点からの近畿学校保健学会への期待と要望についてお話いただいた。高田先生は、学校現場における養護教諭の仕事がますます多様になり、養護教諭はますます多忙になっている現実を、健康相談活動、保健学習におけるチームティーチングなどの実例をあげて説明された。また健康管理面でもプライバシーへの配慮や新しい複雑な健康問題の出現、保護者への対応など、これまで以上に的確さと繊細さが必要とされるようになってきていると話された。そしてこのような現実のなかで、養護教諭は「専門性を持った何でも屋」としてその役割を果たしたいと語られ、近畿学校保健学会は、このような多様な健康課題に取り組む養護教諭を支援するものであって欲しいと要望された。

5名のシンポジストのお話は短い時間にもかかわらず、それぞれ奥行きが深く、示唆に富むものであった。何よりも、本学会が近畿圏にあって、高い志を持ち、学校における子どもの健康問題に正面から取り組んできたことを改めて確認することができた。近畿学校保健学会に脈々と流れるこの伝統は、次の50年、100年の礎となり、本学会の大きな可能性を拓くものと思われる。

記念シンポジウムには多くの学会員が参加された。時間の関係から、参加されたフロアの先生方からは、ご意見、ご発言をいただくことができなかった。今後、様々な機会を捉えて、近畿学校保健学会のあり方についての議論が続けられることを期待したい。

A会場

シンポジウム 児童・生徒の心身の健康と学校保健活動上の問題

座長 大手信重（奈良県医師会学校保健部会長）

昭和33年に児童・生徒の心身の健やかな成長を願って学校保健法が成立した。学校保健の基本理念は当初、教育を通じて「児童・生徒が、健康、安全で幸福な生活のために必要な知識を習得し、習慣を養い、もって心身の調和的発達を図る」ことにあった。

しかし、時代の変遷とともに人々の生活様式は大きく変容し、子供を取り巻く環境は激変した。

子供の問題行動は質、量ともに増大し、学校保健は、荒れの連鎖という未曾有の問題に直面し、大きな社会問題にもなってきた。子供は社会を映す鏡であり、また次世代の姿でもある。軌道を逸脱した子供の問題行動に対して、関係者はそれへの対応に苦慮し、現時点では模索の状態にあるといえる。そこで三師会の立場から、さらに養護教諭の立場から、現在この問題に取り組んでいるそれぞれの学校保健活動をもとに議論することとした。北村は、平成10年より取り組んでいる奈良市の児童・生徒を対象とした「心の健康に関する相談及び診断」事業の成果を報告し、そこから見えてくるものについて考察を加えた。また、上田は、学校歯科医の立場から歯科健康診断の現状と健康増進について述べた。さらに学校薬剤師の北村は「人の生き方と生活」から観るとして自説を報告した。最後に峠は、学校組織の中での保健室の果たすべき役割と養護教諭の支援の在り方を追求した。

B会場 保健学習・授業

座長 松岡 弘（大阪教育大学）

B01 北井利枝 「活動意欲を高める保健学習指導法の工夫」

小学校でブレインストーミング、ロールプレイ、イメージマップづくり、フィールドワーク、3つの実験提示などを組み合わせた、保健学習指導法を工夫したすばらしい実践研究である。教師中心の教授型授業から脱皮し、実践力を養うことを目標としていたが、今後、「子どもがどう変わったかの確認が求められる。

B02 山下弥都里 「中学生のセルフエスティームを育てる選択履修授業の実践」

養護教諭によるすばらしい実践報告である。中3を対象に18時間の授業を実施し、生徒のセルフエスティーム向上を認めたと言う。兵教大・西岡より「リラックス技法である自律訓練法を取り入れたのはなぜか」との質問があり、「受験生の緊張をとるため」との回答があった。

B03 間壁恵子 「養護教諭がかかわる人間科学学習」

文科省の研究指定を受け幼・小・中・養護学校が、共同で今を生きる教育の充実と創造」をテーマに3年間取り組んだ労作である。兵教大・倉富より「年間カリキュラムの妥当性について」質問があったが、「カリキュラムは経験的に作成した」との回答があった。

B04 大道乃里江他 「高等学校の保健教育に関する調査研究」

大阪の3つの大学1年生447名を対象に回顧法で保健単元の小項目別に、その実施度・定着度・教師の重視度を調査し、内容により差異があったことを報告した、滋賀・林より、教師側の問題、即ち体育科中心の立場が影響するのではないかと質問には、「担当教師の苦手意識なのは調べていないが、今後の課題にしたい」と回答があった。

B会場 総合演習・カリキュラム

座長 山本咲子（関西女子短期大学）

B-05 橋本敏子 「「からだ」をテーマに、各学年で取り組んだ総合的な学習」

学年ごとにテーマを設定し、10時間の計画で取り組んだ総合的な学習の実践に関する報告である。これらを通じて教師間の共通理解や協力体制が深まり、学習の場を地域に広めることで、地域の人達との交流ができ、実践に繋がった。また、講師を招いての講話は正しい知識や社会の一端に接する機会となり、さらに、小グループの活動により日頃発言しない生徒の意見の発表や、学習に意欲的でない生徒を引き込むなどの成果が見られた。

B-06 内海みよ子 「中学生の生活習慣確立に向けて「総合的な学習」による指導の成果」

1998年9月以降毎年9月に実施しているA中学校での生活習慣病予防のための健康診査と、同校が

学年・学級の枠をはずし、希望者に履修させている「健康的ライフスタイルを確立しよう」というタイトルの講座選択学習(1999年から実施)に関する報告で、一度でも講座を履修した者と履修しなかった者の1年次と3年次の生活習慣の変化を検討し、今回はその内の運動の変化についての報告があった。

B-07 倉富 護 「小学校段階におけるライフスキル教育カリキュラム試案の作成」

第一次試案を小学校で実施して適切性の検討を行った結果、低学年ではセルフエステームにおける学習は適切であるが、計画実行に関しては問題があり、特に意志決定については必要性や重要性を子ども自身が感じ取れなかったのではないかと推測された。中学年では目標設定、意志決定スキルは適切であるが、ストレス対処の学習については、子どもたちに必要性が感じられなかったのではないかと推測された。高学年ではどの学習内容も適切であるが、時間設定や指導法の問題点等が指摘された。指導目標と学習内容の関連性や発展性をより明確に分析し、第一次試案を実施・修正を繰り返す必要があること、さらに発達段階を考慮した重点スキルの設定、学習内容の工夫の必要があることが報告された。

B-08 西岡伸紀 「教員養成課程におけるライフスキル教育指導者用プログラムの開発(2)ーライフスキル教育に関するニーズ及び関連要因等の分析ー」

2002年1～3月に開催した研修会の参加者に実施した無記名式質問紙調査の内、学校関係者109人の結果を分析(12項目)した。ニーズに関する全体的傾向として、「必要性に教員差有り」「時間確保が困難」「準備に時間や負担」「扱う教科・領域を明示」「保健学習でさらなる扱いを」「総合学習で活用可能」等が高率であった。また、項目間の関連性では教科領域として保健学習が有効であること、指導者用プログラムにはカリキュラム上の位置づけと教職員の共通理解の方策が必要であることが明らかになった。また、関連要因との分析から校種・職種研修経験等には格別の配慮の必要がないことが示唆された。

B会場 健康教育・院内学級

座長 宮下和久(和歌山医大・衛生)

B-09 森脇裕美子 「英国の学校におけるPersonal, Social and Health Education(PSHE)に関する研究」

この枠組みには性と人間関係、薬物、栄養、身体活動、安全等、特定のスキルと能力に関する内容が含まれている。これらの内容はPSHEの枠組みのみならず関連する領域の教育や教科教育と関連づけて実施することが期待され、同時に、学校、家庭、地域社会等、児童生徒の学習環境の整備も含め、保護者、行政の専門家、地域コミュニティが連携して実施する健康教育として期待されているとの報告であった。

B-10 西牧真理 「女子高校生における骨密度測定と健康教育」

保健所と高校との連携による健康づくりを促す健康教育の実践についての報告である。これについて、保健所と高校が連携しての保健事業のきっかけ、今後の連携の方向性について討議があり、連携のあり方、目的が基本的に重要である。また、本研究の主要目的が学校保健と地域保健の連携であれば、連携のあり方に主眼をおいたまとめをするべきである等、活発に意見交換がなされた。

B-11 田丸倫子 「児童の生活習慣に関する研究ー公立、私立小学校における比較についてー」

児童の生活習慣について、公立および私立の児童を対象に「運動」、「栄養」、「休養」の視点から生活習慣の実態を調査し、公立校と私立校の観点から比較した研究である。私立は公立に比べ、睡眠時間が1時間少ないこと。これは4学年を境に顕著に現れること、朝食欠食児童の割合が高いこと、夕食の時間帯が遅い、放課後の遊びが少ない傾向であるとの報告であった。第3学年

からの保健学習の重要性とともに、父兄等家庭への働きかけの重要性が指摘された。

B-12 阪中順子 「奈良県における院内学級の現状と課題－長期入院児童・生徒の学習権の保障をめぐって－」

奈良県における院内学級の閉鎖に伴う入院中の子どもの学習権の保障をめぐって、奈良県の実状と院内学級で学ぶ子どもたちの学習意欲に関する事例紹介を通じて、院内学級の存在意義についての発表がなされた。

C会場 保健指導・保健室運営

座長 児玉なつ子（奈良県教育委員会）

C-01 中川雅永 「保健室管理の簡素化と情報活用について」

コンピュータによる保健室情報管理として総合的な保健室管理システムを作成し、保護者懇談や生徒指導、健康相談、保健指導、学校保健委員会の資料等に活用するため、奈良県内の高校51校に配布し、平成14年度から使用している。高度のコンピュータの知識や技術が無くても活用が出来る優れたシステムであった。

C-02 中村昌代 「10分勝負の保健指導」

実践を始めて3年である。身体測定後の10分間保健指導を子どもたちの発達段階の考慮やテーマ性を持たせることで、児童が自分の心や体について興味をもち自ら考えることのできる健康教育を定着させることが出来た。発想が豊かで楽しい保健指導であった。

C-03 磯田宏子 「養護学校における予防内服の支援について－保健所との連携－」

ノーマライゼーションの視点に立った教育で、地域の保健所と教育現場との連携がスムーズにいった事例で医療の支援を必要とする子どもへの具体的支援の提案であった。今後の各学校での課題になるだろう。

C会場 学校保健活動・連携

座長 徳山美智子（愛知女子短期大学）

C-04 高木喜代美 「中学校における教育相談体制と養護教諭としてのかわり」

コーディネーター型教育相談の体制の中で、自らがコーディネーターを果たす過程で、不登校生徒への支援における学校内連携の重要性の発見と、一つのケースに学校として対応することにより保護者の理解と不安解消の醸成という成果を得たと述べられた。今後も養護教諭の職務として行う健康相談活動と校務として行う教育相談との異同を念頭におきながら、予防的・開発的な見地から研究を深められたい。今後の研究成果を期待する。

C-05 西牧真里氏 「校内ネットワークを利用した保健室連絡の試み」

この試みによって、生徒の保健室来室状況をリアルタイムで学級担任・教科担任に連絡できることになり、多様な問題を抱える生徒の健康相談活動において、早期に校内連携が図れるという成果を得たことを述べられた。情報の発信者である養護教諭と受信者である教諭の間に情報理解に乖離が生じないよう配慮することが重要であること、そして、この活動に対する校内の共通理解と情報管理のもと、学級担任・教科担任・校務分掌係等との双方向の活動が深まり、健康相談活動の質的な向上が図られるよう期待する。

C-06 中岡千恵子 「学校保健委員会を組織の中核に」

5年間の活動の中で、学校保健委員会を地域ぐるみで子どもの健康を支援する体制づくりの拠点として位置付けることによって、保護者・地域・学校のネットワークを強めることにつながっていた、と述べられた。ヘルスプロモーションの理念に沿って推進されているこの活動を、開かれた学校、生涯保健の観点からますます充実させるためには、平成9年、保健体育審議会答申におい

で指摘している、養護教諭の企画力・調整能力・実行力に加えて、経営能力の活用がますます重要になってくると考える。地域における養護教諭としての活躍を期待する。

C-07 大川尚子 「健康相談活動支援体制整備事業にかかわって」

国が委嘱した当事業にかかわり、この事業を活用することにより、精神的なケアを必要とする児童に対する教職員や保護者の共通理解が得られ大きな成果があったこと、養護教諭が精神医学の専門的知識・カウンセリングの技術の研鑽を深めると共に、全教職員・保護者・医療機関等関係機関と連携強化を図ることの重要性を実感したと述べられた。児童生徒の心の健康課題・問題に対して、多様な職種がかかわり、情報連携から行動連携が推進される輪の中に在って、養護教諭は、自らの職務の固有性・独自性について、今こそ、健康相談活動の実践を通して明確にしていく責務があると考え、今後の研究によりこれらがより明確化されていくものと期待している。

C会場 学校事故・学校安全

座長 八木保(京都大学)

C-08 菊池美奈子 「養護教諭の専門性から考察した学校事故に対する危機管理の在り方—喪失体験の視点から」

演者等が支援した重篤な心臓疾患を有する高校生の5事例を示し、危機管理・健康管理・健康指導の過程が報告された。先天性の疾患を有している3事例については、幼少期より自己の疾患を容れ周囲の配慮も得て学校生活を特に支障なく送っていたが、2事例については、高校生期に発症した事例(肥大型心筋症)で、健康を失ったことへの激しい混乱がみられた。生き甲斐を失うなどの衝撃を克服し、自己健康管理に至るまでの支援体制において、中心的な役割を担う養護教諭の専門性が示されていた。

C-09 長谷川ちゆ子 「学校管理下における死亡事例の分析—1989年から10年間の事例について—(第2報)」

学校管理下における死亡事故防止をねらいとして、日本体育・学校健康センターの10年間の死亡事例から、小・中・高校生について、交通事故死・突然死・事故死・熱中症等の災害発生の場合別死亡件数及び事故直前の状況について学年別に検討していた。これによると「下校中」「登校中」「課外指導」「教科等」「特別活動」「休憩時間」「その他」の順に多く、いずれの学年も「登・下校中」が多く、交通事故が1,116/2,648件を占めていた。犯罪事例はとの質問に、暴行・暴力・喧嘩などをあげていた。

C-10 野澤章子 「“けが”に学ぶ～子ども達への安全教育活動の試み～」

日本体育・学校健康センターにみる平成14年度の災害について、けがの原因として{けんか・規則違反・設備不備・やむを得ず・不注意・自分一人}などある中で自分で負傷(51%)が一番多い。運動中のけがが多く、ボールによる突き指やゲーム中の転倒が半数を占める。転倒時に手が出ない現象など、子どもの健康・安全に生きる力の弱さが危惧される。自然な遊びの中で培われてきた体を守る力を、時間・空間・仲間の激減という生活環境で、身につけることが困難になったようだ。⑧関係方面とも連携して、生きる力を育てる養護教諭の役割についてさらに検討したいとの意が表れていた。

C会場 歯科保健

座長 寺田光世(京都教育大学)

C-11 白石龍生 「加齢と永久歯萌出との関連について」

永久歯の萌出本数を男女6～11歳までの発育過程について把握し、身長や体重の年次推移と同様に保健の学習教材として利用できるかどうかについて検討した結果、児童生徒は自らの発育現

象を捉える際の教材として使用できる、という論旨の報告であった。そういえば、子どもの頃、食事中に突然ポロリと歯が抜け落ち、慌てて口の中の噛みかけご飯を吐き出した。吐き出したものを掌にのせ、不安な思いでそれをすぐさま母親に見せて、歯の抜け落ちた訳を尋ねた。そのときの私には口内で何が起きたか理解できず、不安とともに強い驚きのような感情があとに残ったように今も記憶している。歯が抜け落ちるほど大事件なのに、なぜ母親はニコニコしているのだろうか、なぜ痛くないのだろうか、そのとき考えたことについてもかすかに憶えている。乳歯の抜け落ちと永久歯の萌芽は子どもにとって体の大きな出来事である。これを小学生の学習教材に取り上げることは適時的であるといえる。歯科教材をどうか完成していただきたいと考えている。

C-12 澤山美佐緒 「高校生の不正咬合に対する認識度とその実態について」

不正咬合には歯科保健上の諸問題が多く関連するにもかかわらず、現状は歯指導より不十分な扱いになっている。そこで不正咬合の実態と意識について男女生徒に調査を行ったところ、実態や意識に男女差があること、歯と不正咬合は関連することなどが明らかになったとしている。歯の矯正には临床上と審美上の問題が混在する。それに多額の費用がいる。保健指導や健康相談に当たっては、それなりに特別な配慮が必要な事柄であり、発表者はその点を強調していた。指導の方向としてどう扱うべきか。今後課題が残る。他高校の生徒についても調査され、また保護者の意識も視野に入れて今後も研究を進めてほしいと考えている。

D会場 喫煙・性教育

座長 辻井啓之 (奈良教育大学)

D-01 米田寛子 「小学校における喫煙防止の保健指導について」

6年生児童110名に対する喫煙に関するアンケート調査ならびに、6年生児童20名に対する喫煙防止授業の実践についての発表であった。アンケート調査では、大人になったらたばこを吸いたいと思うかという設問に対して、思わないという回答が100%であったところが目をひいた。家族にたばこを吸う人がいるかという設問には、50%がいてと答えており、喫煙習慣の開始を防ぐためには、家族に対する啓発も重要ではないかと思われ、その点に関してはフロアからの指摘もあった。プレゼンテーションソフトを用いた実践授業について、授業後の児童の感想をみる限り、概ね目的を達していると思われるが、使用する資料や指導の継続性など、まだ改善する余地もあると考えられた。

D-02 美馬 信 「短大生の喫煙行動と喫煙関連要因について(1)―短大生の喫煙行動の現状―」

女子短大生464名を対象とした調査に関する発表であった。現在の喫煙者は、15.1%で、前回調査9.4%に比し、1.6倍に増加していた。また、初回喫煙の時期のピークは、前回調査に比し高校から中学に移行しているとのことであった。喫煙経験者の生活様式は、非喫煙者に比し、アルバイトをしている者、飲酒経験者に有意に多かった。また、周囲喫煙者との関係では、友人に喫煙者がいるものに喫煙経験者が有意に多かった。喫煙者は、喫煙が健康によくないこと、周囲に迷惑であることについての認識はかなり持っているにもかかわらず、調査結果は禁煙の難しさを示していた。

D-03 菊池美奈子 「高等学校における性教育体制整備への取り組みに関する一考察」

保護者・教職員・生徒と対象別に講演会の実施、生徒保健委員会と希望者による活動(学習会、文化祭での展示発表、府立高等学校保健研究発表大会参加、地域中学校への訪問指導、保護者を対象に発表)、家庭科・保健体育科と連携した授業等の実践が行われた。養護教諭が問題を提起し、性教育の必要性を訴え、組織的な取り組みを重ね、その評価を得ることによってその必要性が浸

透していくことが明確になったということであった。

D-01、D-02の二題を通じて言えることは、早期の喫煙防止教育の必要性である。喫煙を薬物依存の立場から捉えるならば、喫煙習慣の開始を防止することが最重要課題であることは自明である。D-01において、小学校6年生において喫煙に興味を持っているものがほとんどいないにもかかわらず、女子短大生の調査においては、喫煙開始の時期のピークが中学生に早まっている。喫煙防止教育をいつから行うかに関してはまだ議論があるところであろうが、行う時期、方法などについて最大限効果があがるように考えていく必要があると思われる。また、D-03の発表では、性教育に関して、養護教諭の情報発信の重要性が説かれているが、現実には教職員の共通理解を得るということがたいへん困難であり、組織的な対応の遅延要素となっていることも重ねて説かれている。できれば、校長がある程度トップダウンで積極的に指導し、学校保健委員会の活動を活発なものとして養護教諭を充分支援していくことが大切ではないかと思われた。

D会場 精神保健

座長 元村直靖(大阪教育大学)

D-04 佐伯洋子 「中国人留学生の健康と生活に関する報告」

M女子短大生129名(留学生48名、日本人学生81名)を対象として、疲労自覚症状とライフスタイルについて調査を行った。その結果、留学生は睡眠に十分注意しながら、厳しい生活環境の中でキャンパスライフをすごしており、特に、深夜の帰宅は食生活に悪影響を及ぼしており、支援の必要性が示唆された。

D-05 藤原 寛 「女子大生の生活習慣と心の健康について」

女子大生150名の生活習慣と生活活動力、精神満足度、精神健康度の関連を調べたところ、女子大生に日常的な生活習慣は定着しておらず、多くの女子大生は身体活動をQOLの維持向上のために積極的に活用していないことが明らかになった。

D-06 木村洋子 「看護短大学生の精神的健康について」

看護短期大学生114名の精神健康状態を、GHQを用いて測定し、コーピング尺度、エゴグラムとの関連を調べた。その結果、56.5%のものが精神的に不健康であり、情動焦点型のコーピングが健康群に多く、エゴグラムと精神健康の関係が明らかになった。

D-07 西 能代 「不登校児童・保健室登校児のCDRS-Rスコアによる評価の試み」

不登校児童、保健室登校児に対して、児童用の抑鬱尺度であるCDRS-Rスコアを用いて、児童の抑鬱を評価した。その結果、不登校児童や保健室登校児の抑鬱傾向が非常に高いことが明らかになった。このことは、今後、学校現場で教員が使用できる抑鬱状態の評価尺度の必要性が示唆された。

D会場 栄養・糖尿病

座長 白石龍生(大阪教育大学)

D-08 永井純子 「学齢期小児の食生活・栄養摂取の14年間の変化ービタミン、ミネラルの栄養素についてー」

貴重な継続的研究であるGoshiki Health Studyに関する発表であった。小学校5年生時のビタミンおよびミネラルの摂取量を1986年度と1999年度で比較し、この間総エネルギー摂取量は、増加しているにもかかわらず、Ca、RFe、KといったミネラルおよびビタミンA関連の摂取量が減少していることが報告された。

会場から調査対象集団として五色町が全国を代表しているかまたどのような食品を主に摂取すれば問題点を改善できるかについて質問がなされた。国民栄養調査等と比較して五色町が特異で

あるということはないことおよびミネラルおよびビタミンに関しては調理方法等により破壊されることもあり、調査方法の限界も発表者より指摘された。今後更なる研究の継続が望まれる。

D-09 野田知加子 「学齢期小児の食生活・栄養摂取の14年間の変化—中学2年生の栄養摂取量の変化—」

前演題と同様 Goshiki Health Study についての発表であった。14年間を比較し、中学2年生の栄養摂取量特に脂肪摂取に関して報告された。蛋白質摂取量の減少とともにP/Sが有意に減少していることが報告された。会場から有効回答数、調査方法およびアンケートの記述方式等について質問が出され、具体的に発表者より説明がなされた。

従来より血清コレステロール濃度への影響から、P/S=1が有効な指標とされているが、今後は、多価不飽和脂肪酸全体としてではなく、個々の脂肪酸の摂取量等についても検討する必要があると考える。

D-10 大矢紀昭 「1型糖尿病児の思春期における問題点」

ケトアシドーシス発作や不登校、退学に至った1型糖尿病児の3つの事例が報告された。学級担任が適切に対処した場合のみ良好な経過をたどったことが明らかにされた。養護教諭の役割が重視されることが考えられた。1型糖尿病に対しては、インスリンの自己注射あるいはポンプによる注射しか治療法がないことを考えると、1型糖尿病児の子どもの性格や考え方を考慮しながら学校と医療現場とのより密接な連携が必要であることが再確認された。

D会場 肥満

座長 山本公弘(奈良女子大学)

D-11 井上文夫 「小学生の不定愁訴と肥満との関連」

肥満と不定愁訴との関連について調査を行った結果、目立った有意差は見つからなかったという報告である。著しい肥満は別として、軽度及び中等度の肥満は、やせよりむしろスタミナがあるように振る舞うことが多い。ある程度以上の肥満はリスクファクターではあるが、不快な症状をおこすとは限らない。そこに実践者の指導の困難が存在することを示唆する結果である。

D-12 宮井信行 「学齢期の肥満および高レプチン血症がインスリン抵抗性に及ぼす影響」

肥満に関連してとくに新しい分野の研究を学校保健の場で行ったものである。レプチンは脂肪組織から分泌され、糖代謝や脂質代謝に影響を及ぼす。肥満度が増すと、脂肪組織の脂肪細胞のサイズが大きくなるが、それにしがたいレプチンに対する身体の反応が変化してくるといわれる。

さらに対象者のグループ分けに工夫した研究成果が期待される。

D-13 松永かおり 「夏季休業中に行った肥満指導についての一考察」

3名の肥満児童を対象として、夏季休業中の生活習慣や体重を記録させ、励ましのハガキなどを出しながら、肥満の改善に努めた実践報告である。このようにこまめに児童に接してくれる指導者には頭が下がる思いである。

50 周年記念シンポジウムー近畿学校保健学会の過去、現在、未来を語るー

和歌山県立医科大学 宮下和久

近畿学校保健学会50周年記念企画事業の一環として、近畿学校保健学会の過去、現在、未来を語るというテーマのもと5人のシンポジストを配して、勝野眞吾・兵庫教育大学教授（50周年記念事業企画委員長）のもとで行われた。

上林久雄先生からは、学会の誕生当時の背景について、武田眞太郎先生からは、本学会と非常勤専門職の学校三師の役割について、林 正先生からは、学会組織運営について、北村陽英先生からは、養護教諭養成と卒後研修について、高田恵美子先生からは、現場の養護教諭の立場をふまえて実践の視点から学会への期待についてそれぞれ述べられた。

第二次大戦後、WHOの憲章が発表され、Comprehensive health（包括的健康）が唱えられる中、「学校保健」を考え直すことの必要性を当時の大阪学芸大学・伊藤教授、富士教授、京都教育大学・川畑教授らが提唱し、当時、学童の健康問題の中心であった寄生虫、姿勢の問題、結核等に対する保健・医療的側面を支援するための場が必要だとして近畿学校保健学会が成立した。

本学会成立直後の1955年、第25回日本衛生学会、第10回日本公衆衛生学会、両学会による建議として「学校保健教育強化に関する建議」を決議し、文部大臣、国立大学協会長、大学基準協会会長あてに決議文を提出している。これらは、大阪学芸大学教授・富士貞吉先生らが仕掛人であったという当時の背景が紹介された。これによって学習指導要領等が改正されていく訳であるが、本学会が産声をあげる、真に「学校保健」が時代の要請であり、先達の先見によって誕生したとの感を改めて強くした。そして、この近畿学校保健学会が親会の日本学校保健学会誕生に先がけて成立し、親会の成立を促したのである。

しかし、本学会の学会としての態勢を整えるために長い時間と多くの労力がつぎ込まれた。

1975年、学会の組織強化のため、近畿学校保健学会組織運営委員会が発足し、会則改正草案委員会を経て、1981年に第28回学会において新会則が発足、暫定幹事長として上林久雄・大阪教育大学教授が推挙され、1982年度から就任、事務所は大阪教育大学に置かれた。1984年、新幹事の互選により幹事長に上林久雄氏を選出、1986年、後任に武田眞太郎・和歌山医大教授を選出（任期6年）、次いで1992年、林 正・滋賀大学教授（同4年）、1996年、勝野眞吾・兵庫教育大学教授（同6年）、2002年、石川哲也・神戸大学教授が選出され、今日に至っている。

まさに「ゼロからの出発」、「与えられた学会ではなく創る学会」の精神で本学会のあり方が討議され、会員の固定化、維持に関しても幾多の試みがなされて、今日の学会組織が定着していった。会員自らが学校保健のあり方を追究し、学会を発展につぎ込んだ情熱の軌跡を読みとれた。

学会のあり方に関して、上林幹事長が就任あいさつの中で「片すみの陽かげの場所にある学校保健を陽のあたる場所へ。今日の学校現場の子どもたちの心身の健康状態を見るとき、学校保健なくして明日の教育なしという時期に来ている。大学と教育現場と地域いづれとも密接な連携を保ち、会員のための研究ではなくて、真に子どもたちの健康のために本学会の使命がある。」との紹介が林 正先生よりなされたが、4半世紀を過ぎても学校保健の本質、学会のあり方を明快についた言葉であり、深く感銘を受けた。

今後の学会への提言として、「近畿学校保健学会は、50年の長い歴史を刻んできたが、その本質は、現場の子どもの問題を十分に討議し、その結果を研究会に出すことであり、これは、今後変わることもない重要な質であろう。」

「学校が抱える真の課題を理解し、その上で学会に対しても一般社会に対しても問題を提議し、あるいは意見を表明する。これが集約されて将来の健全な学校教育への方向づけを行い、関係機

関への意見具申を学会としても積極的に行う。そのような社会責務がある。子どもたちの心身の健康に表れてくる大人の社会の歪みや学校教育の偏り等を子どもたちの健康を通して読み取り、是正する。その力を「学校保健」が持ち行使すべきで、とりわけ非常勤の専門職としての学校三師の力で指導性を発揮してほしい。」

「本学会は、『子どもたちの健康課題に責任を持つ学会』として重要である。そして、その成果を子どもたちにフィードバックさせることである。21世紀はさらに充実して継続していく必要がある。少子化、高齢化社会は避けることが出来ない。中でも子どもの健康が重要であるが、問題は多岐に亘り、関わる学校保健スタッフの資質の充実が必要である。全国の各県に設置されている看護大学と教員を養成する機関が相互に協力して子どもたちにフィードバックする環境をどう構築していくかが重要である。」

などのコメントがなされ、これからの本学会の未来を描くうえで、これらは貴重な指針となるだろう。

50周年記念シンポジウムを拝聴し、全員の情熱で生まれ、支えられて来た本学会の軌跡を改めて認識させられました。と同時に、将来の展望として、現場の問題として提起された子どもの健康課題を学会として捉え、子どもたちにどう返していくのか、健康教育を学校教育の中でどのように戦略的に展開し、その結果を評価していくのか、学校非常勤職員の活性化を学会としてどう考えるのか、養護教諭の人材養成、卒後研修に関して、看護大学（大学院）等と教育養成機関の連携をどう進めていくか、などの諸点に思いをめぐらしながら、今後共、本学会は「子どもたちの健康に責任のある学会」であらねばならないとの認識を新たにしました。

学会印象記（B会場）

大阪教育大学 小山 健蔵

近畿学校保健学会は、50周年を迎え、6月28日（土）に奈良教育大学の北村陽英教授のご尽力で盛会裏に終了しました。

本学会に入会して20数年になりますが、今回初めて学会印象記を書くことになりました。当日、感じたことを率直に書きたいと思います。

午前中は3つの会場で37題の一般研究発表が行われました。私は、共同研究者の発表の行われたB会場で午前中拝聴させていただきました。梅雨空にもかかわらず、第1演題から多くの出席者がみられ、活発に討論されました。今回の学会では、養護教諭実践報告を特に募集され、B会場においても、保健学習や総合的な学習の時間における実践報告がなされました。この試みは、各人の経験を実践報告の発表という形で持ち寄り、互いに活発な議論がなされ、情報交換がなされることが大きなねらいであると思います。しかしながら、発表時間内に内容をまとめきれておらず、せっかくの内容が中途半端にしか伝わらなかったことは少し残念でした。発表者は、学会である以上、学会の形式に則り、発表時間内に内容をまとめることは最低限必要なことと考えます。実践報告の発表形式は、ポスター発表の方が、その内容がより生かされるのではないかと思います。

50周年を記念してのシンポジウム「近畿学校保健の過去、現代、未来を語る」を拝聴し、50年のあゆみを読みながら、私事で恐縮ですが、学生時代、第25回の大阪の年次学会で始めて学会のお手伝いをさせてもらったこと、第28回のと歌山の年次学会で初めて発表させていただいたことが、ついこの間のように懐かしく思い出されました。この学会の50年のあゆみから、子どもたちの健康問題を真摯に受け止め、地域の特性を大切にし、ニーズの高い問題に対しても解決を探ろうとする良い伝統・歴史を感じました。ここ数年、演題を出すようになりましたが、教育現場での問題を大学等で深く掘り下げ、その成果を教育現場にフィードバックできるよう、子どもの

健康に役立つよう、努力したいと思います。

今回、評議員会と総会で、本学会の発展に多大のご功劳のあった、後藤先生（大阪）、南條先生（滋賀）、竹田先生（奈良）の3先生が名誉会員に推挙されたことは大変喜ばしいことでした。

今後も、本学会が、多くの新入会員を迎え、さらに発展することを願っています。

最後にこの拙文を書く機会を与えてくださった、石川幹事長、北村年次会長に感謝いたします。

学会印象記（C会場）

京都大学 八木 保

C会場では「保健指導・保健室運営」「学校保健活動・連携」「学校事故・安全教育」「歯科保健」の各テーマでまとめられた演題であった。

「保健室管理の簡略化と情報活用について」と題した口演では、奈良県高等学校養護教育研究会で作製したシステムで、保健室来室状況・定期健康診断の結果・保健調査などの情報管理や保健情報を活用する状況がまず報告され、その有用な内容を受けて、このシステムの利用方法を訊ねるなどの質問もあり、活き活きとした発表で始まった。

次ぎの「10分勝負の保健指導」では、毎月の身体測定時後にできる「すきま時間」を利用した授業時間を確保し、児童の状況をよく理解して児童の興味・関心を引き出す授業づくりに創意工夫し、児童の好む実験などを用い、からだの科学を授業する様子が語られた。子ども達が目を輝かせて学んでいる姿が目に見え、浮かぶ。

「養護学校における予防内服の支援について」の演題では、児童の家族に結核患者が発生した場合で、保健所と連携してDOT（直接服薬支援）方式を実施し、すべての服薬を確認して結核予防内服治療をした報告がされた。地域の保健所と教育現場との連携がスムーズにできた事例で、養護教諭の働きが伺われる。学校医との情報交換も出来ていた。次のセッションでは「中学校における教育相談体制と養護教諭としてのかわりについて」「構内ネットワークを利用した保健室来室の試み」「学校保健委員会を組織活動の中核に―地域と学校の連携を図るために―」「健康相談活動支援体制整備事業に携わって―校外の医療機関・関係機関との連携―」の各演題で、不登校生徒をはじめ保健室来室生徒らへの対応・心の相談・カウンセラーとの協力・地域との連携・医師の派遣・教職員保護者等も含め対象にした研修会など、コーディネートする養護教諭の姿や働きが映し出され、子ども達の心と体を育む現場での対応の中からの研究報告に、座長ともども活発に討議を深めた。討議も活発で、時間を超過し、プログラムの進行が心配になってきた。フロアの方も初めは後から2列目くらいの20名余であったが、次第に席が埋まり、次ぎの第3セッション「学校事故・安全教育」では最前列までの満席になった。歯科保健のセッションまでこの会場で発表討議された。いずれも、子ども達の健やかな成長を願っての現場に密着した課題への取り組みであり、とくに第3セッションまでは、みな養護教諭の現場からの報告で、その多忙さとともに、科学を背景に情熱をかけた働きが活き活きと感じられた。

学会印象記（D会場）

大阪教育大学 白石龍生

D会場では、喫煙・性教育、精神保健、栄養・糖尿病および肥満に関するセッションの一般講演がなされました。自分自身の一般講演がC会場であり、喫煙・性教育および精神保健の1演題そして座長をつとめた栄養・糖尿病の演題しか聞くことが出来ませんでした。D会場のテーマは

すべて養護教諭が保健指導ならびに保健学習を展開する際に役立つ事柄が多く、教育実践に即したものが多かったように思います。

集団を対象とした広範な疫学調査をはじめ症例報告もなされました。また対象も小学生、中学生、高校生、短期大学生および留学生と多岐にわたっていました。ほとんどすべての演題に関して会場から質問がなされ、活発な議論がなされていたように思います。

今回は早朝の幹事会から始まり最期の懇親会まで参加しましたが、あいにくの雨にもかかわらず、実にさわやかな印象を受けた学会でした。近畿学校保健学会の大きな節目となる50周年記念大会を引き受けられ、その使命を十分果たされた北村陽英学会長をはじめ、会場での進行係りを的確に勤められた奈良教育大学の学生諸氏に対してお礼を申し上げて印象記とさせていただきます。

学会印象記(D会場)

大阪明浄女子短大 佐伯洋子

D会場は喫煙・性教育3題、精神衛生4題、栄養・糖尿病3題、肥満3題の計13題の研究発表があった。対象者は小学生が6題で最も多く、ついで大学生4題、中・高生で3題であった。内容はアンケート調査による貴重なデータ分析の結果報告も参考になったが、夏季休暇中実施された「指導者からの励ましの往復書簡」などの肥満指導、小学生の喫煙防止教育を手作りの情報処理教材で提示、性教育を保健室から企画し、生徒のみならず保護者、教職員へと対象者を広げて実践、14年間継続して同じ地域の健康教育に関わり得た「栄養摂取の変化」の報告、またI型糖尿病の女儿患者治療経験を通しての問題点の指摘など実践報告が特に印象に残った。

発表は座長のリードで遅延することなくスムーズに進行したが、会場施設の関係でパワーポイントをはじめとする提示機器が一切使用できなかったことが残念であったことと、7分という短い発表時間であるので、大会企画側で発表資料を会場会員へ配布する配慮があればよかったと思う。

平成 15 年度近畿学校保健学会評議員会・総会報告

日時 平成 15 年 6 月 28 日（土曜日）12：00～13：30
場所 評議員会 奈良教育大学 101 講義室 （12：15～12：55）
総会 奈良教育大学 101 講義室 （12：00～13：30）

議事概要

- 1 幹事長挨拶
- 2 議長選出
堀内康生（大阪教育大学名誉教授：前年度年次学会長）選出
- 3 平成 14 年度会務報告
幹事長より平成 14 年度会務報告がなされ、了承された。
- 4 平成 14 年度決算報告
幹事長より平成 14 年度決算報告がなされた。
- 5 会計監査報告
角道静枝監事より、会計監査報告がなされ、平成 14 年度決算は、承認された。
- 6 平成 15 年度予算案
幹事長より平成 15 年度予算案の説明がなされ、承認された。
- 7 名誉会員の推薦
本年度は、後藤英二（大阪）、竹田斌郎（奈良）、南條徹（滋賀）の 3 名の推薦があり審議の結果承認された。
- 8 次期学会開催地及び会長について
開催地：滋賀県 年次学会長；大矢紀昭（滋賀医科大学教授）の案が提出され、決定した。
- 9 近畿学校保健学会 50 周年記念事業
近畿学校保健学会 50 周年記念事業の進捗状況が、勝野実行委員長、武田記念誌編集委員長から報告され、了承された。

（資料）

平成 14 年度近畿学校保健学会会務報告

1. 会員数 405 名（名誉会員 13 名を含む）
平成 15 年 3 月 31 日現在
2. 会議開催、学会通信など
平成 14 年 4 月 6 日 平成 14 年度第 1 回幹事会開催（於：大阪教育大学）
4 月 25 日 近畿学校保健学会通信 No.102 発行
5 月 18,19 日 第 49 回近畿学校保健学会年次学会開催（於：クレオ大阪中央）
(学会長堀内康生)
5 月 19 日 平成 14 年度評議員会及び総会を開催（於：クレオ大阪中央）
5 月 2 日 近畿学校保健学会通信 No.103 発行
10 月 26 日 平成 14 年度第 3 回幹事会開催（於：神戸大学）
12 月 21 日 平成 14 年度第 4 回幹事会開催（於：神戸大学）
平成 15 年 1 月 25 日 平成 14 年度第 5 回幹事会開催（於：神戸大学）
2 月 20 日 近畿学校保健学会通信 No.104 発行

近畿学校保健学会平成 15 年度予算

【収入】

	予算額	摘要
会費収入	1,050,000	3,000×350 人
雑収入	5,000	利子、寄付金等
前年度繰越金	807,775	
合計	1,862,775	

【支出】

印刷費	500,000	学会通信 (3 回) 等
郵送費	250,000	
事務費	100,000	
人件費	100,000	
会議費	30,000	
交通費	20,000	
学会補助金	200,000	滋賀県へ支出
予備費	662,775	
合計	1,862,775	

近畿学校保健学会平成 14 年度決算

平成 15 年度 3 月 31 日現在

【収入】

	予算額	決算額	予算額-決算額	摘要
会費収入	1,050,000	1,011,000	39,000	3,000×337 人
雑収入	5,000	15	4,985	利子
前年度繰越金	674,857	674,857	0	
合計	1,729,857	1,685,872	43,985	

【支出】

印刷費	500,000	264,075	235,925	学会通信 (no. 101-103), 総会議等
郵送費	250,000	236,060	13,940	
事務費	100,000	19,256	80,744	
人件費	100,000	20,000	80,000	
会議費	30,000	31,796	△1,796	
交通費	20,000	0	20,000	
学会補助費	200,000	200,000	0	奈良へ支出
役員選挙費	100,000	60,000	40,000	選挙管理人件費
予備費	429,857	46,910	382,947	大阪へ新入会員 23 人分 送金手数料
次年度繰越金		807,775	△807,775	
合計	1,729,857	1,685,872	43,985	

上記の収支決算書に相違ないことを確認しました。

平成 15 年 6 月 10 日

監事 (評議員会・総会資料には署名捺印のものを提出
しましたが、印刷の都合上省略させていただきます。)

近畿学校保健学会会員数

平成 15 年 3 月 31 日現在

所 属	名誉会員	評議員	一般会員	計
京都	4	29	21	54
兵庫	0	47	29	76
大阪	3	71	72	146
奈良	3	34	7	44
滋賀	1	26	15	42
和歌山	2	26	10	38
他府県	0	0	5	5
計	13	233	159	405

名 誉 会 員

氏 名	所 属	自 宅 住 所
安 藤 格	大 阪	〒664-0865 伊丹市南野中曽根 141
川 畑 愛 義	京 都	〒605-0925 京都市東山区今熊野日吉町 48
上 林 久 雄	大 阪	〒600-8406 京都市下京区高倉五条上ル 157
黒 田 健 雄	和歌山	〒640-8329 和歌山市田中町 2-13
出 口 庄 佑	奈 良	〒564-0061 吹田市円山町 21 番 8 号
笠 松 勇 次	和歌山	〒649-1202 日高郡日高町大字萩原 562
北 村 李 軒	京 都	〒606-0846 京都市左京区下鴨北野々神町 18-1
橘 重 美	奈 良	〒632-0093 天理市指柳町堀毛 339
中牟田 正 幸	奈 良	〒633-0206 宇陀郡榛原町天満台西 4-21-9
植 村 良 雄	滋 賀	〒520-0807 大津市松本 2-9-34
米 田 幸 雄	京 都	〒569-0088 高槻市天王町 14-19
杉 浦 守 邦	京 都	〒520-0864 大津市赤尾町 16-21
玉 井 太 郎	大 阪	〒530-0003 大阪市北区堂島 1-3-19
*後 藤 英 二	大 阪	〒593-8305 堺市堀上緑町 1-9-11
*竹 田 斌 郎	奈 良	〒630-8341 奈良市南城戸町 33
*南 條 徹	滋 賀	〒524-0061 滋賀県守山市赤野井町 169

*は、15 年度評議員会において新しく名誉会員となられた方

追悼

「近畿学校保健学会名誉会員」

小澤忠治先生を偲んで

平成 13 年 10 月 16 日ご逝去

和歌山県学校歯科医会

川 口 吉 雄

小澤先生とは、昭和 61 年、先生の叙勲祝賀会でお会いして依頼、疎遠になっておりましたが、その後病氣療養中と洩れ承わりながらも、必ずやご快癒され後輩へのご指導をいただけるものと確信しておりましたが、去る平成 13 年 10 月 16 日ご逝去の訃報に接し、誠に哀悼の極みでございます。

先生とは、私が和歌山県教育委員会技師として学校保健行政を通じ、又医政を通じ 40 有余年にわたりご指導をいただいた大先輩であることから誠に僭越ですが追悼の筆を取らせていただいた次第です。

昭和 24 年と云えば、終戦後進駐軍の統制下にあり、「学校衛生」から「学校保健」と改称し、「教育としての学校衛生」、すなわち「健康への教育」としてスタートした学校保健の草創記であり、用語はほとんど横文字で示され、アメリカナイズされた学校保健時代でもありましたが、先生より先進的な素晴らしい健康教育特論を拝聴し、若輩の私にとって大変興味深い有意義なご教示をいただいた数々が今もって鮮明に蘇ってまいります。

先生は又、昭和 26 年に学校薬剤師制度が制度化されるに及び、学校保健を一段と推進するためには、学校三師、更には保健主事、養護教員等児童生徒の健康に関係ある「学校保健関係者」等による組織活動の必要性を提唱され、中央で日本学校保健会が設立されるに及び、本県においてもその早期結成を力説され、先生が中心となり発起人会を結成し、現在の和歌山県学校保健連合会が組織され、発足当初より役員に就任、昭和 36 年より昭和 43 年まで 2 期県連合会長の重責を果たされました。先生は又、県学校保健連合会の最大行事でもある、県学校保健研究大会の開催に当たっても第 1 回大会より大会役員として常にリーダーシップをとって運営指導されたほか、昭和 28 年近畿学校保健学会発足に当たっても当初より学会役員としてご活躍される等々、学校保健の推進向上にご尽力頂いた数々のご功績に対し深く敬意を表し感謝申し上げます。

又先生は、家業である醸造業を経営されながら若くして医政の道にはいられ、昭和 36 年より昭和 44 年迄県歯科医師会会長及び県学校歯科医会会長並びに昭和 38 年より約 30 年間にわたり日本学校歯科医会常務理事、参与等の要職を重ねられる等幾多の団体の役職をつとめられ、特に歯科医療界の向上発展に盡力されたことは周知の通りであります。

今、先生のご遺徳を偲びつつ幾多のご功績を稱え衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

第50回日本学校保健学会開催のご案内

年次学会長 勝野 眞吾(兵庫教育大学)

1. 期 日 2003年11月2日(日)～3日(月)

学会案内 URL: <http://www.life.hyogo-u.ac.jp/skatsuno/jash50th/>

2. 会 場 神戸国際会議場(神戸市中央区港島中町 6-9-1、JR 三ノ宮駅よりポートライナーで10分)

TEL 078-302-5200 FAX 078-302-6485 会場 URL: <http://www.kcva.or.jp/kcc/icck/>

【会場案内図】

3. 後 援 文部科学省 日本学校保健会 兵庫県教育委員会 神戸市教育委員会,
WHO 健康開発総合研究センター(WHO 神戸センター), 大阪府教育委員会
京都府教育委員会 奈良県教育委員会 滋賀県教育委員会 和歌山県教育委員会
日本医師会 兵庫県医師会 日本学校歯科医会 兵庫県歯科医師会
日本学校薬剤師会 兵庫県薬剤師会

4. テーマ 「学校保健・健康教育の可能性の検証」

5. 日程

月 日	時間	学会長・特別講演・シンポ	教育講演	教育講演	一般演題 口演	一般演題 ポスター
11月 2日	9:20 ～ 10:00 午前	学会長講演:勝野眞吾 「現代の健康課題と学 校健康教育ー期待と可 能性ー」	_____	_____	_____	_____
	10:00 ～ 12:00	特別講演Ⅰ:川畑徹朗, 並木茂夫 「ライフスキルと健康教育 ー研究と学校教育実践の 連携ー」				
11月 2日	13:00 ～ 14:00 午後	総会	_____	_____	_____	_____
	14:00 ～ 15:45	特別講演Ⅱ:Dr. Kelli A. Komro 「プロジェクト・ノースラン ド:学校と地域の連携によ る健康教育」	_____	_____	_____	_____
	16:00 ～ 17:45	シンポジウム1:三木とみ 子他 「今、養護教諭の職能と職 務を考えるー今後の変貌 を予測する中でー」	特別報告:松本健 治他 「学校保健の用語 をめぐっての特別 報告」 (学会活動委員 会)	教育講演1:松浦尊 鷹 「地域で子どもの健 康を考える」(～ 17:00)	口演	_____
11月 3日	9:00 ～ 11:00 午前	シンポジウム2:石川哲也 他 「健康教育:教科再編へ の展望」(学会活動委員 会共同企画)	教育講演2:小沼杏 坪 「思春期のこころの 葛藤と薬物乱用」 (～10:00) 教育講演3:木原雅	日本学校保健学会 奨励賞講演 (～10:00) 教育講演4:鬼頭英 明	口演	ポスター 発表 (10:00～

	11:00 ～ 12:00	教育講演5:大島明 「がんの疫学と健康教育」	子 「青少年の性行動と 性感染症の危険」 (10:00～11:00)	「学校の環境と健康」 (10:00～11:00)		12:00)
11月 3日 午後	13:00 ～ 14:45	シンポジウム3:中村正和 他 「たばこのない学校」	_____	_____	口演	ポスター 発表 (～ 15:00)
	15:00 ～ 17:00	第50回日本学校保健学 会・近畿学校保健学会共 催公開パネルディスカッ ション:武田眞太郎他 「学校の安全と危機管理ー 子どもの命を守るー	_____	_____	自主シン ポ (予定)	_____

6. 企画等

1) 講演

11月2日(日)

- ①学会長講演「現代の健康課題と学校健康教育ー期待と可能性ー」

勝野眞吾(兵庫教育大学教授)

- ②特別講演Ⅰ「ライフスキルと健康教育ー研究と学校教育実践の連携ー」

川畑徹朗(神戸大学発達科学部助教授) 並木茂夫(川口市立芝東中学校校長)

- ③特別講演Ⅱ「プロジェクト・ノースランド:学校と地域の連携による健康教育」(通訳実施)

Dr. Kelli A. Komro (Principal Investigator of Project Northland, Division of Epidemiology, School of Public Health, University of Minnesota)

2) シンポジウム

11月2日(日)

- ①シンポジウム1「今、改めて養護教諭の職能を考える」

コーディネーター:三木とみ子(女子栄養大学教授)

高橋香代(岡山大学教育学部教授)

久野能弘(中京大学心理学部教授)

平川俊功(埼玉県立総合教育センター指導主事)

鈴木裕子(横浜市立高田東小学校)

11月3日(月)

- ②シンポジウム2「健康教育:教科再編への展望」(学会活動委員会共同企画)

コーディネーター:石川哲也(神戸大学発達科学部教授)

角屋重樹(広島大学教育学部教授)

高橋浩之(千葉大学教育学部教授)

松村京子(兵庫教育大学生活・健康系教育講座教授)

鈴木渚(金沢大学大学教育開放センター教授)

- ③シンポジウム3「たばこのない学校」

コーディネーター:中村正和(大阪府立健康科学センター健康生活推進部部長)

北山敏和(和歌山県教育委員会西牟婁地方教育事務所所長)

西岡伸紀(兵庫教育大学生活・健康系教育講座助教授)

井上真理子(東京都中野区立谷戸小学校養護教諭)

3) 特別報告「学校保健の用語をめぐる特別報告」(学会活動委員会)

11月2日(日)

座長:松本健治(鳥取大学教育地域科学部教授・学会活動委員会委員長)

白石龍生(大阪教育大学教授・学会活動委員会副委員長)

鎌田尚子(女子栄養大学教授)

林 正(滋賀大学名誉教授 学会活動委員会副委員長)

藤居正博(滋賀県学校歯科医会)

吉村英子(文部科学省教科書調査官)

小林育枝(学校救急処置研究会)

4)教育講演

11月2日(日)

- ①教育講演1「地域で子どもの健康を考える」 松浦尊磨(五色町保健・医療・福祉統括理事)

11月3日(月)

- ②教育講演2「思春期のこころの葛藤と薬物乱用」

小沼杏坪(KONUMA 記念広島薬物依存研究所所長)

- ③教育講演3「青少年の性行動と性感染症の危険」

木原雅子(京都大学大学院医学研究科国際保健学講座助教授)

- ④教育講演4「学校の環境と健康」 鬼頭英明(文部科学省健康教育調査官)

- ⑤教育講演5「がんの疫学と健康教育」 大島明(大阪府立成人病センター調査部部長)

5)パネルディスカッション

11月3日(月)

第50回日本学校保健学会・近畿学校保健学会共催公開パネルディスカッション

「学校の安全と危機管理」

コーディネーター: 武田真太郎(和歌山県立医科大学名誉教授)

林 正(滋賀大学名誉教授)

大橋郁代(元西宮市教育委員会学校保健課課長補佐)

野口克海(園田学園大学教授・元堺市教育長)

元村直靖(大阪教育大学教授)

6)一般発表(口演、ポスターセッション)

- ①口演: 11月2日(日)16:00~17:45、11月3日(月)9:00~12:00 および 13:00~14:45

- ②ポスターセッション: 11月3日(月)10:00~12:00 および 13:00~15:00(準備時間含まず)

- ③プログラム一覧: 下記の通り掲載する予定です。

・第50回学会ホームページ(9月中旬) URL: <http://www.life.hyogo-u.ac.jp/skatsuno/jash50th/>

・「学校保健研究」次号(10月20日発行)

7)日本学校保健学会奨励賞講演: 11月3日(月)午前 502号室

8)留学生によるカントリーレポート(国際交流委員会特別企画): 11月3日(月)午前 ポスターセッション会場

9)懇親会

11月2日(日) 18:30~20:30 会場レセプションホール(3階)

10)その他

- ①「エイズ教育情報」ランチョンセミナー: 11月3日(月) 12:00~13:00 会場 501号室

- ②会場禁煙: 本学次学会では、会場内を一切禁煙とします。

7. 学会参加費

1)参加費等内訳

- ③当日参加

9,000円(講演集代込み、講演集は当日会場で受領)

(学生・大学院生)

5,000円(講演集代込み、講演集は当日会場で受領)

- ④懇親会費 6,000円

- ⑤講演集代のみ 3,000円

2)振込先(郵便振り込み)

加入者名: 第50回日本学校保健学会年次学会 口座番号: 00900-1-242070

※お届けした振り込み用紙以外の通常の振り込み用紙をお使いの場合には、内訳を明記して下さい。

8. 年次学会事務局

第50回学会では、業務に応じて、下記のように役割を分担しています。ご留意下さい。

1)演題申し込み・発表受付、参加登録等の問い合わせ

〒560-0082 大阪府豊中市新千里1-4-2 千里LCビル 14F 学会センター関西

TEL 06-6873-2301 FAX 06-6873-2300 E-mail: jash50th@casjo.org

2)一般的事項の問い合わせ

〒673-1494 兵庫県加東郡社町下久米 942-1 兵庫教育大学 生活・健康系教育講座内

第50回日本学校保健学会事務局(事務局長 兵庫教育大学助教授 西岡伸紀)

TEL(兼FAX) 0795-44-2178 E-mail: nobnishi@life.hyogo-u.ac.jp(西岡) 0795-44-2180(勝野)